

## ギリシアの夜

藤田健治

アテナイの飛行場に着いたのは九月の終りの或る夕方であった。飛行場の建物から市までのバスに乘ろうと外へ出た時、すぐ向こうに真っ赤な夕日の下に見えたサロニカの海を忘れる事が出来ない。それは本当に南の海特有の重たい油のようにトロリとした海であった。ギリシアでは海はタラッタという。このことばは波打って跳る海を現わす美しいことばだが、しかしそれは決してサラサラした軽快さではなくて、ユッタリと重みのある事を感じさせる。その通りの実感なので市までのバスに乗ってからも飽かずに眺めたが、そのうち大きな赤い太陽は海に沈んだと思ったら、東の空に満月に近い月が出て、夏の夕方のように清々しかった。余り樹らしい樹のない道路を市に向かう間、往来に立って乗物待っているギリシア人を初めて見た。しかしこ

れはギリシア彫刻とは似もつかないイタリア人からも少し艶をなくしたような感じで、承知はしていたが少々失望した。ところがやがて正面遠くに近附いて来たアクロポリスの丘の上のバルテノンが眼にはいつた時は、やはり我知らず深く心をうたれた。アクロポリスは丘というより山といった感じでアテナイ市のどこからも見える程高い。だから昔アテナイの外港ピレウスから丘の上に立ったアテナの神像が見えたというのも本当かも知れない。そしてバルテノンは何といっても世界中で最も美しい神殿の一つである。それが夕方の晴れた空にクッキリと白い輪廓を浮かび上らせていたのである。

しかし私がこれから話そうと思うのはアテナイの事ではなくて、それからペロポネソス半島をバスで三時間ほど南下したミュケネの事である。ミュケネは例の自叙伝（日本訳名 古代への情熱）で名高いシュリーマンが発掘した俗称アガメムノンの城や墓のある所である。大きな岩山の上に二頭の獅子が両側から爪立って背のびした姿の彫つてある三角形の一枚岩を頂いて左右も

同じ一枚岩で出来た城門をはいり坂道を登りつめて城塞の遺跡に立つと、あたり一帯の平野が脚下に俯瞰され、遠くトロイア遠征に船出したと思われる海までかすんで見える雄大な城である。この地下の墓を掘つて出たものがアテナイの博物館にミュケネ文化の代表的なものとして陳列されている黄金の仮面やコップやダイヤモンドの燦然たる遺品である。城から少し離れて二つの蜂の巢形という円形のお墓がある。中は石で畳んだ円い四、五十人はいれる位な広さである。シュリーマンは前の城塞の中のお墓はアガメムノンのものだと信じていたし、後のものは一般にその父アトレウスの宝庫だといわれているが、いずれもそのままに受け取り難い。寧ろおそらくはもっと古い紀元前十五、六世紀の頃からのものと推定される。

ところでギリシアの風物は必ずしも豊かであるとは云い難い。山は砂礫と岩肌のアラワな禿山が多くて、さすがデルフィあたりの谷は美しいオリヴの森で蔽われているが、大体は藪にまばらな緑が見えるだけの場合が多く、全体として薄茶色の荒涼と

したものである。ミュケネまでの山また山のバス道路はよく通じており城塞自体もよく発掘整理されているが、その辺一帯は大體こうした景観で、その中をソダをつんだウサギ馬を追ったり、同じ馬に引かせた荷車に乗ったりしている僅かな数の貧しい男女に時折逢うだけである。話はそういうミュケネでの事である。

何年前か前ギリシア駐在のイギリスの外交官が文豪ハックスレー（だったと思う、間違つたらごめんさい）を案内してミュケネ見物に来て一晩その宿舎に泊つた。生憎その日は日の暮れから雨でそれに風まで加わつて、夜の眠りはまだかでなかつた。二人は淋しい環境の淋しい宿舎でその日みたミュケネの太古の遺跡が頭を去らず、遙か遠い昔のギリシアの英雄時代の戦争や血なまぐさいお家騒動や暗殺などを考えるともなく思い出していた。するとこの闇夜のしかも激しい雨風の中を宿舎の入口をトン、トン、トンとたたたく音がする。そしてやがてかすれた声でユックリと聞のびのびのしつた一音一音きつたように訪ずれるのが聞こえて来た。何とそれはア・ガ・ム・ム・ノン

と聞こえるではないか。二人はゾツとしてベットの上につき上つて青い顔を見あわせた。するとまたトン、トンと音がしてア・ガ・ム・ム・ノンとそれこそ今日見た暗い墓から出て来た亡霊のように訪なう声が嵐の中かから幾度か途切れ途切れに聞こえて来たのである。二人がベットの中にもぐりこんで頭から掛布を冠つたのはもとよりであつた。

あくる朝さして来た太陽の光の中できいた話はゆうべの嵐の中では正反対に朗らかな笑に終るものであつた。シュリーマンはミュケネの発掘の間中そこに長く留まつて村人達の尊敬を一身にあつめた。その辺の村で子どもが生まれると彼はその名付親に懇望された。シュリーマンはそのギリシアに寄せた限りない情熱から、これらギリシア人にその偉大なる民族の子孫である事を自覚させるため（？）、イリアスやオデッセイアに出て来る英雄や美妃の名をそれらの子ども達につけたのである。だからミュケネのあたりには泥だらけで鼻をたらしたアキレスやヘクターやヘレネが出来たわけである。宿舎の亭主はその頃シュリーマンに名付けられたひとりアガムノンと

いうミュケネの城主トロイア戦のギリシア方の総大将の名を貰つていた。しかし時はたつてシュリーマンも死にその頃の鼻たれが今は宿舎の亭主となつた。生来怠け者かバクチでもやったのか彼は借金をこしらえ家業も左前となつた。昨夜訪れたのはその貸主の借金の催促であつたという事である。

アテナイについた夜、政府のあるコンステイテューションの広場からちょっとはいつた横町の或るレストランで日本の外交官のTさんと卓をかこんでビールを呑みながら、私はこの話をきいた。何だかどこかできいたような話でもあり、私の記憶が間違いでなくてハックスレーならばどこかで書いていそつた話でもあつた。Tさんはレストランの往來越しに前の建物を指しながら、これが元のシュリーマンの家です。シュリーマンも、後が続かなくて、この家も今は身売りをして政府のものですといわれた。一代の情熱の発掘者シュリーマンにやらんだ話をきいた後で、私は月光をあびているベネチア風の外から見ても瀟灑な構えの家を見るときもなく見ていた。